

特集2

平成18年7月 豪雨災害を振り返る

体験談から
教訓を学ぶ

昨年7月18日から19日にかけて、梅雨前線の活動が活発となり、記録的な豪雨災害が発生しました。身の危険を感じた人、安全を求め避難した人、救助に参加した人など、多くの人が自然災害の脅威を感じました。今回この体験談を通して教訓を学び、今後の備えとしましょう。



体験
No.2

午前2時の避難勧告

川手上自治会役員(写真左から 長谷隆明さん、倉谷隆人さん、小林勝彦さん、椿一孝さん、池上徳夫さん)

教訓

日ごろから地域で仲間づくりを地域の状況を常に確認し、異常を察知する

「昭和47年の水害の時は、堤防が決壊し、川手町は川と進言した。」と、椿さんは川手上自治会長の長谷隆明さんをはじめ自治会の役員へ連絡。避難態勢の準備が始まった。椿さんはカッパを着て車橋へ向かうと、パトロール中の滝口市長と出会った。「避難勧告を出した方がいいだろうか」と滝口市長から相談を受け、「まだ大丈夫でしょう」と一度は答えたが、その後さらに水位が上がり「避難勧告を出してほしい」と進言した。



7月19日9時ごろの西城川

「昭和47年、川手町は堤防の決壊、道路の欠壊、そして御神田山の一部崩壊と大きな被害に遭った。短時間に避難できたのは、水害の怖さを経験し、危機感を共有する役員が「あ・うん」の呼吸でそれぞれの役割を果たしたといえる。また、昭和47年以降、堤防やため池の改修整備、土砂崩れ防止の山の整備を行い、住民が一丸となって安心・安全

なまちづくりに取り組んできたことも大きい。」行政が避難勧告の判断をするのは難しい。やはり地元を一番よく知っている住民が、異常をいち早く察知し、行政へ進言しないとけない。また、地域の普段の状況を、いつも確認することが大事」と役員は話す。川手上自治会では、日ごろから河床の堆積土を撤去したり、堤防ブロックや道路の干割れなど危険箇所を点検したり、防災の取り組みを怠らない。

川手上地区は、ここ30年で新しい住民が3倍に増えた。新しい住民を含めて、日ごろからレクリエーションや地域行事を通じて、仲間づくりを行い、防災意識を高めている。



災害経験者の第六感が働く

7月18日の夜11時。庄原市街地の西城川近くに住む椿一孝さんは川を眺め、「まだ大したことはない」と水位を確認し、布団に入った。降りしきる雨音で夜の1時10分に目が覚めると、大雨が気になり外へ出た。すると、自主避難する近所の人に出会い、驚いて川を見ると水位は橋まであと1メートルに達していた。たった2時間で川の状況が大きく変わった。

午前2時、市の災害対策本部は川手町183世帯へ避難勧告を発令。消防団による広報活動とともに自治会の役員を中心に各世帯へ電話連絡し、「市総合体育館へ避難してほしい」と呼びかけた。しかし、真夜中の電話にでない方も多い。消防団と協力し、2人1組で各戸を回り、ドアを叩い

日ごろから安心・安全なまちづくり

「高齢者や病人、ペットを飼っている人がいる中で、みんなよく協力して来てもらった。そして、非常に短時間でしかも整然と避難ができた」と自治会の役員は振り返る。

現在、川手町の4自治会で自主防災組織の立ち上げを検討している。「地球温暖化で、いっどんな災害が起こるかわからない。これからも日ごろの地域活動を通して、仲間づくりを行い、隣近所で助け合える地域にしていきたい」と役員は話

体験
No.1

初めての自主避難

幹戸君雄さん(口和町竹地谷)

教訓

まず自分の身は自分で守る意識を 早め早めの避難を呼びかける



幹戸さんが立っている畑も川になった

7月19日の午前0時前後「ドンドンドン」「起きてください」と、大きな声でドアを叩く音がした。口和町竹地谷で、たばこの販売店を営む幹戸君雄さんは、誰か夜中にたばこでも買いに来たのかと思って玄關へ出てみると、地元の消防団員が「大事じゃ。大水が出て大変なことになっている」と叫んでいる。幹戸さんは当時、竹地谷自治振興会の会長をしていたため、消防団員がその対応を相談に来た。

自主避難を呼びかけに、小さな橋を渡った家へ向かったが、すでに川の水位は橋までに達し、渡ろうにも足がすくんでしまった。「僕が行きます」と消防団員が救出に向かい、近くの集会所へ避難した。「真夜中で外灯も少なく、周りが見えない。また、谷から多くの水が出て道路が川のようになり、避難するにも怖かった」と幹戸さんは話す。土砂崩れの心配のあった高齢者世帯は、「90歳を超えて避難できない」と言われ、少しでも安全な隣の土蔵で寝てもらった。

早めの避難を実感

集会所へ避難したのは12世帯の約30人。ほとんどが着の身着のまま、口和支所から毛布などを支給され、集会所で炊き出しを行った。飲食には困らなかったが、高齢者も多く、体も不自由なため、朝になって「介護用のおむつがない」と困る人もいた。

「まさか、この地域が避難することになるうとは...」。幹戸さんは初めての自主避難を振り返り、「無事に避難できたのは地元消防団のおかげ。よく面倒を見てもらった。今回の災害で、より一層早めの避難が大切だと感じた。まずは、自分の身は自分で守るという防災意識を強く持つこと。お互いに年を取り、誰かが助けにくれると楽天的に考えてはだめ。当事者が常に早めの準備を心掛けたい。また、防災無線をもっと有効に活用し、早め早めの自主避難を呼びかけてほしい」と話す。



口和では大規模林道が崩壊



市は昨年の災害被害の拡大を防ぐため、6月中旬にため池などを再点検する防災パトロールを行いました。

・自主防災組織は、地域の住民が組織結成に合意し、規約、組織、活動内容を定めることで成立します。
・市役所や消防署に、許可申請や届け出などの手続きを行う必要はありません。しかし、

自主防災組織の要件

まず自治会や自治振興区を中心に災害について地域で話し合い、自主防災組織を作りましょう。

自主防災組織とは、地域住民が自主的に連帯して、防災活動を行う組織のことです。
大規模な災害が発生した場合、市役所や消防署などの防災機関だけでは、十分な対応ができない可能性があります。このような時、住民が一致協力し、地域ぐるみで取り組むことで有効な対策をとることができま

災害に備え自主防災組織を

——災害に強いまちづくりを目指して——

体験
No.3

休耕田がまるで滝のように

国上美明さん（西城町大屋）

教訓

里山の整備が災害を防ぐ 防災訓練を しなければいけない



自宅近くの休耕田を滝のように流れる水。（国上さん提供）

流木の原因は、平成16年の台風でヒノキやスギが倒れた所が土砂崩れを起こし、一気に流れ出したためだった。
「人工林の怖さと間伐の大切さを身にしみて感じた」と話す。
近所の家を見渡した後、国上さんは「お宅の方は大丈夫？」と電話で集落の

7月19日の午前2時、西城町大屋の国上美明さんは、「ゴロン、ゴロン」と地響きのような音が目覚めた。「おそらく岩が川を流れる音だ」と思うが、ものすごい水がでているなと感じたという。
国上さんは道路や川がどうなっているか心配で、一瞬外に出てみようかと思っ

ても危ないと思い、夜が明けるのを待った。
夜が明けて外に出ると、休耕田がまるで滝のようになっている水が流れていた。初めて見る大水に、ただぼう然として、自然の恐ろしさを感じていた。
川の近くへ行くと、流木が川を堰きとめ、水が休耕田へ流れていることが分かった。とにかく水の流れを変えなければと、自宅のパワ

安否を確認した。「谷から大きな岩が道路に出て通行できない。また、県道に出るまで4カ所ぐらいが沢崩れを起こしている」と報告があった。病人がいるため、いち早く孤立状態を解消しようと西城支所へ連絡し、建設会社と一緒に岩や倒木の撤去を行い、ようやく昼過ぎに県道までの道が開通した。

住民主催の防災訓練を

平成16年の台風、平成17年の豪雪、平成18年の豪雨と3年間続けて大きな災害に見舞われている。
西城町全体で災害について真剣に取り組もうと、西城町自治振興区連絡協議会の会長を務める国上さんは各自自治振興区長が集まる会議で防災マニュアルの作成を呼びかけた。また、昨年の暮れには総領町の秋山義治さんを招き、亀谷自治振興区の防災マップの取り組みについて学習会を開き、防災マニュアルの作成に取り組んだ。
今年3月、備北地域事務

市役所へ積極的に相談を
自主防災組織を結成しようと思っただけでは、具体的などうしていいかわからないという声がよく聞かれます。このような時は、総務課行政係（0824）731123または各支

所地域振興課へ相談してください。また、職員が地域に出向いて説明する「出前トーク」もお気軽にご利用ください。



6月2日庄原市で行われた平成19年度市町災害対応図上訓練

組織づくりの方法

1、自主防災組織の結成について、自治会や自治振興区に提案する。

2、結成準備を行う担当者を決める。

3、自主防災組織の基本的な事項について案をまとめる。

- ①組織のかたちの決定
- ②組織の編成案の作成
- ③役員の人選
- ④規約案の作成
- ⑤活動計画案の作成
- ⑥収支見込み

4、役員会でよく話し合い、よりよい案に修正する。

5、役員会で案の了承を得る。

6、自治会や自治振興区の総会で、討議、可決する。

自主防災組織の結成